



TITLE:

# 裘衛諸器考：西周期土地所有形態に 關する私見

AUTHOR(S):

伊藤, 道治

---

CITATION:

伊藤, 道治. 裘衛諸器考：西周期土地所有形態に關する私見. 東洋史研究  
1978, 37(1): 35-58

ISSUE DATE:

1978-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153688>

RIGHT:

# 裘衛諸器考

——西周期土地所有形態に關する私見——

はじめに

伊藤道治

最近陝西省岐山縣を中心とする所謂「周原」の地域から西周時代の重要資料が多數發見され、西周史研究の新しい展開を促進しているが、本稿では、そのなかの一つ、一九七五年二月に岐山縣董家村において發見された裘衛を作器者とする一群の青銅器の銘文を中心として、西周中期の土地制度について考察しようと思う。

裘衛によって作られた器は、簋・盃・五祀鼎（五祀の紀年があることにより、五祀鼎とよんで、つぎの九年の紀年をもつ九年鼎と區別する）及び九年鼎の四器がある。簋には二十七年三月の紀年があり、裘衛が王―穆王か―より恩賞を與えられたことを記したものである。五祀鼎は裘衛と邦君厲との間に行なわれた田―農地―の授受に關する記録であり、盃は三年三月に行なわれた裘衛と矩伯との間の田の授受、九年鼎は同じく裘衛と矩伯との間に行なわれた林の授受に關する記録である。したがって本稿で主要な對象となるのは、盃・五祀鼎・九年鼎の三器であり、唐蘭氏をはじめ、諸家の意見は、この三器にあらわれる人名或いは銅器の形態などから見て、共王時代のものとする。この時代判定に關しては、ほぼ妥當な見解と考えられ、したがって、裘衛を中心として行なわれた土地の授受は、共王の時代における社會經濟の重要な資料とすることができるとする。以下、諸家の考察を検討しながら私見を述べることにするが、ただ本稿の主題が土地制度の考察にあるので、この問題に關連する部分のみにふれ、全文の解釋は別の機會に譲ることにした。<sup>①</sup>

## 一 五祀鼎について

はじめにこの五祀鼎の全文を左にかかげる。

佳正月初吉庚戌、衛以邦君

厲告于邢伯・伯邑父・定伯・燎伯・伯

俗父曰、「厲曰、『余執龔王恤功、

于昭大室東逆榮二川。』曰、『余

舍女田五田正。』」迺訊厲曰、「汝

賓田否？」厲迺許曰、「余審賓田

五田。」邢伯・伯邑父・定伯・燎伯・伯俗

父迺講、使厲誓。迺令參有

司・司土邑人趙・司馬頰人邦・司

工陶矩・內史友寺甥、帥履裘

衛厲田四田。迺舍寓于厥邑。

厥逆疆眾厲田、厥東疆眾散

田、厥南疆眾散田眾政父田、

厥西疆眾厲田。邦君厲眾付

裘衛田、厲叔子夙・厲有司繻

季・慶癸・癸襲・荊人敢・邢人

これ正月初吉庚戌に、衛は邦君の厲を以って邢伯・伯邑父・定伯・燎伯・伯俗父に告げて曰く、「厲が曰らく、『われ龔王の恤行を執りて、昭の大室の東北において二川を榮せり。』曰らく、『われ汝に田を五田舍して正さん』と。」

迺ち厲に訊して曰く、「汝は田を賓するや否や？」と。厲は迺ち許して曰く、「われ審らかに田五田を賓せん」と。

邢伯・伯邑父・定伯・燎伯・伯俗父迺ち講じ、厲をして誓わしむ。迺ち參有司たる司土の邑人の趙・司馬の頰人の邦・司工の陶矩・內史の友の寺甥に令して、帥いて裘衛の厲の田四田を履ましむ。迺ち寓をその邑に舍す。その北疆は厲の田に眾び、その東疆は散の田に眾び、その南疆は散の田と政父の田に眾び、その西疆は厲の田に眾ぶ。邦君の厲が眾に裘衛に田を付せしは、厲叔の子夙・厲の有司の繻季・慶癸・癸襲・荊人の敢・邢人の倡犀・衛の小子の□な

倡犀・衛小子□<sup>①</sup>。□者其饗餼。衛用

作朕文考寶鼎。衛其萬年

永寶用。佳王五祀。

り。□者それ饗餼せり。衛もつてわが文考の寶鼎を作れり。衛よそれ萬年も永く寶として用いんことを。これ王の五祀なりき。

この文で第一に注意されることは、この衛と厲との間の土地の授受が、訴訟問題となっていたことである。それは第一行目から第二行目にかけての文によって明らかである。すなわち「衛以邦君厲告于邢伯……」（衛が邦君厲を以って邢伯等に告げて）という句形は、たとえば晉鼎の「（晉）以匡季告東宮」（晉が匡季を以って東宮に告ぐ）、或いは甯从鼎の「甯从以攸衛牧告于王」（甯从が攸衛牧を以って王に告ぐ）などに見られ、また以と告との間におかれる客體を省略した師旂鼎の「使厥友弘以告于白懋父」（その友の弘をして以って白懋父に告げしむ）も同じ意味の文と考えられる。これら三器はいずれも訴訟關係の文章であることを考えると、この鼎銘の場合も、當然衛が邦君厲を提訴したものであると言わなければならない。その提訴の前提になった事件が、第三行の厲曰より始まり、第五行の五田で終る一段であり、この事件に際して厲が述べた言葉が、そのまま引用されたものと解される。しかもそれが引用されたことは、この言葉が、厲から衛に述べられたものであり、二人の間で交わされた約束であったと考えられるべきものであろう。その約束の履行に問題が生じたために、訴訟となったのである。<sup>④</sup>

この一段は第四行の二川にいたるまでの一節と、つぎの曰字以下の二つに分けることができる。前節は、厲が共王の意圖した恤功を執行し、その際に昭大室の東北において、二川を榮したことを記したものである。この昭大室は昭王を祭る廟の大室と解されている。榮字を唐蘭氏は山川に對する祭祀である榮に解し、周瑗氏は營に解し、匠居の意味であると述べているが、<sup>⑤</sup>二川に對してどのようなことを行なったかは、必ずしも明らかではない。私は釋字としては周氏の説をとるものであり、その内容は二筋の河川に對する治水などの土木事業を行なったものと考えている。すなわち共王がある事業を意圖し、そのために厲は二川に對して土木工事を行なったのである。

それにつづいて句を改め、曰字を用いて次ぎの節を始める。この曰字の主格が誰であるかについては、周瑗氏は衛であるとし、従つて次の余も同じく衛ということになる。周氏によれば、この一節は、衛が汝すなわち厲に對して五田を與えて、土地の交換を申し入れたものと解したのである。これに對して、唐蘭氏は、文中には省略されているが、その主格は共王であると考え、この文は厲が二川を祭祀した功に對して、恩賞として厲に五田を含したことを述べたものであると解し、さらにこの恩賞は正式のものではなかったと註している。この解によれば、銘文中の余は共王、汝は厲をさすことになる。しかし唐氏は後に説を改めて、この曰字の主格を厲とし、衛に對して五田を出租することを述べたものであり、しかもそれは周王の意向によるものだとして解している。

唐氏は、このように説を改めた理由については何もふれていないが、本銘の後段において、厲から衛に對して四田が舍——讓——せられたことが述べられているので、前半の文中の何處かに、厲から衛に田が渡されることが書かれていることが必要であると考えたからであろう。たしかにこの唐氏の新しい説は、この銘文の理解という點では、一步前進したものはあるが、この一段の前節、すなわち第三行の余執から第四行の榮二川に至る間の文との關係をどのように考えるかに對しては何もふれていない。その點ではかえつてこの一段の意味を不明瞭なものとしている。<sup>4)</sup>

これに對して、周瑗氏が衛をその主格と解した理由は、第一行の以字を與の意味に解して、衛が邦君厲とともに邢伯らに告げたと解し、第三行曰厲曰以下を、その際に衛が厲に述べた語と解したからである。したがつて周氏は第三行第三目の曰字を謂字と同じと解しているのである。確かに西周の金文中には、後期の大簋の「王令膳夫豳曰趨嬰曰余既易大乃里」（王が膳夫の豳に令して、趨嬰に曰（＝謂）わしめて曰く、われすでに大になんじの里を賜えりと）の如く、曰字を謂字の意味に用いた例があるが、このような用例はむしろ例外的な用法であつて、これに依據することは危険であると言わねばならない。周氏がこのような解釋を行なつたのは、はじめに述べた「以：告：曰：」という文が、金文中においてどのような場合に使用される形式であるかということを理解しなかつたことによると、この銘文が衛と厲との間の土地

の交換の記録である以上、属が衛に五田を貢するのに對して、衛から属に田を渡すことを述べた文章が當然この銘文中にある筈であると考えたからであらう。しかしこれは「以：告：曰：」という文が訴訟の文型であることを見落したために全文の理解を誤ったものと言わねばならない。<sup>⑧</sup>

私はこの一段は、この訴訟が行なわれるに至った理由を述べたものと解するのであるが、第三行の属曰以下は、属が衛に對して、共王の恤功を執行するに際して、昭の大室の東北で、二河川に對する土木工事を行なうことを告げたものであると解する。おそらくその工事地域内に衛の土地がふくまれていたからであらう。而かもその工事に際し、衛の土地に何かの損害があったか、或いは衛が出費を必要とするような理由がおきたために、属からその補償を出すことになり、それを約束したのが、第四行の曰字以下の文であると考ええる。したがって、この第四行の曰字の主格は勿論属であり、文中の余は属、汝は衛ということになる。しかしこの約束が履行されなかったために、衛の提訴となつたのである。その際この工事がどのようなものか、また属が約束した内容が何かを記しておけば、衛をはじめ關係者には、この事件の経緯とその訴訟の内容は明らかであつたものと考えられる。勿論實際の訴訟狀には、衛の被害情況や属の約束不履行のことも詳しく述べられていたか、訴訟狀にかわつて口頭による陳述が行なわれたのであつて、銘文ではその一々のことは省略されたのである。

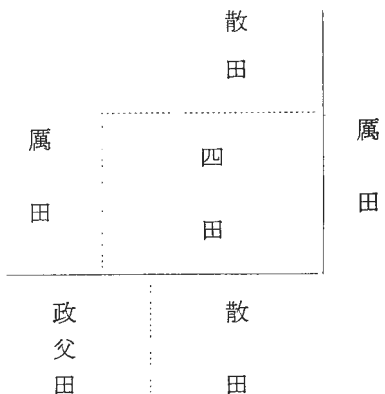
ところで、この一段後半の「余舍女田五田」の舍の意味は、唐蘭氏は余の音であり、給予の予と同じであるとしている。確かに令鼎の「余其舍汝臣卅家」（われ《周王》それ汝に臣卅家を舍せん）の舍などは予の意味に解することができる。しかしこのほかに金文では令彝や小克鼎の「舍令」（令を舍す）のごとく令を發するの意味に使用されるし、また『詩』小雅車攻の「舍矢如破」や小辨の「舍彼有罪」など古典の用例では放つの意に使用されることを考えると、舍には單に予<sup>あた</sup>えるというよりも、所有者が手放なすという意味がふくまれていることを注意しておく必要がある。

さて以上の如き衛の提訴にもとづき、属に對して、「田を貢するか否か」との訊問が行なわれ、属は約束通り、五田を

悉く宣せん」ことを認めたことが、第五行下半から第七行にかけて記される。この宣字は他の金文にもあらわれるが、殆どどの注解に賦であり、租であると解されている。唐蘭氏、林甘泉氏はこの租の意味をとり、厲が衛に對して出租すなわち五田を貸出して、その代償を徴するとの意味に解したのであり、さらに溯及して「舍汝田五田」の舍をも出租・租給と釋するに至っているのである。さきにのべたように、唐氏が後に説を改めるに至った理由には、この宣字を租即ち出租の意味に解していたために、氏の最初の解釋では通じ難いと判断したことが含まれていると考えられるが、然しすでに指摘したように、これでは第三行から第四行にかけての文との關連が失なわれて了うのである。また林氏は、出租の件と、第三行から第五行にかけての文との關聯については何もふれていない。むしろ宣を出租の意味にとる限りは、この二つの部分の關係を無理なく説明することは不可能であらう。

一體、金文における宣字は、頌鼎・頌壺の「令汝官司成周宣甘家、監司新造宣、用宮御」（汝に令して成周の宣の甘家を官司し、新造の宣を監司せしむ、用つて宮に御いよ）の宣、あるいは兮甲盤の「其進人其實」（その進人《徒隸》として進貢された人》とその宣）というときの宣は、賦として集められたものであると考えられている。<sup>⑩</sup>これに對して俚生簋の「厥宣卅田」（その宣の卅田）や次章でとりあげる衛盂の「厥宣、其舍田十田」（その宣は、それ田十田を舍す）というときの宣については、周璣・林甘泉の兩氏らは價即ち價格の意味にとつて區別しようとする。しかし私はこの二つの用例に共通してあてることができる意味を求めることが本來必要であると考ええる。賦とし租とする考え方はその一つである。たしかに多くの宣字の用例について適用することができる。しかし本銘の場合、その部分のみの語句としては租田の意味で通しないことはないが、全文の意味上の聯關が失なわれることから見て、租の意味にまで擴大することは不可能である。まして「舍」という動詞が手放す意味をもっていることから考えて、出租とすることは誤りであると言わねばならない。<sup>⑪</sup>現在のところ私にも適解は見出だし得ないが、賦字に相當する文字であるが、割り當てる或いは納めるという意味に考えるのが穩當ではないかと思う。これについてはのちに衛盂の銘をとりあげるときに再びふれることとする。

かくして属が承認したのを承けて、邢伯ら五人は情況を検討して最終的な成案を得て、その履行を属に誓約させ、さらに司土・司馬・司工の三有司と内史の属官に命じて、成案に従って衛に渡された属の四田を實地について踏査させたのである。その結果、寓すなわち字が属の邑内に割り當てられたのである。この場合の字は單なる屋宇の意味ではなく、地域の意味であり、當然それは四田の地域である。その地域は、北は属の田、東は散の田、南は散と政父の田、西は属の田と



接している地域であった。これを圖示すると上のようになる。したがってこの四田は、散と政父の所有地に接する属の土地の東南角に位置した地域であったことがわかる。属の所有地の一隅が割譲されたのである。

この四田と記される土地がどれ程の面積をもつものであったか。西周後半の金文には、一田とか五田といった記載が見られることを考えると、田は數量名詞としてある程度規格化された面積をもっていたと考えられる。ただ唐蘭氏のいうように、この一田が百畝の面積であったかどうかは必ずしも明らかにはできないが、もしこれが認められるならば、四百畝ということになる。勿論この數字はおそらく所謂井田制を念頭においたものであろう。しかしここで重要なことは、數量的な問題にあるのではなくて、周圍を他の領主の所領に囲まれた小さな地域が分割されて衛に渡されたという点である。

いま一つ注意しておくべきことは、属が五田を舍することを認めたのに對し、最終的には、邢伯らによって、四田と決定され、しかも三有司によってそれが現場において確認されるという手續がとられている点である。四田のおかれた位置から見ても、属が五田を割くことは不可能ではなかったと考えられるが、四田と決定されたのは、おそらく衛の受けた被害や譲渡されるべき土地の情況が調査された上で行なわれたものと考えられる。かつてふれたように、當時土地や人口の實



態は可成りに正確に周王朝において把握されていたが、その記録にもとづいた調査が行なわれたものと考えられる<sup>③</sup>。しかもその結果は三有司や史官によって確認の上、記録されたのであって、周王朝による土地の掌握が組織的に行なわれていたことを、この銘文はよく示しているといえよう。

最後に、第十四行後半より第十七行にかけては、属が衛に田を予えた際に、属の家臣と衛の家臣が同行し、のちに饗應が行なわれたことを記したものである。散氏盤などにも同様なことが記録されているから、土地の譲渡などの際には常にこのようなことが行なわれたのであるが、このことは、領主の土地が、これら家臣たちによって差配されており、その實態を掌握するものが彼等であつたことを示すものと言えよう。

## 二 衛盃について

はじめに衛盃の全文を左にあげる。

隹三年三月既生霸壬寅、

王再旂于豊。矩伯庶人取

瑾璋于裘衛。才八十朋。厥寅

其舍田十田。矩或取赤琥

兩・麀犀兩・賁貽一。才廿朋。其

舍田三田。裘衛迺虘告于

伯邑父・榮伯・定伯・琫伯・單

伯。伯邑父・榮伯・定伯・琫伯・單

伯迺令參有司…司土微邑・司

これ三年三月既生霸壬寅に、王は旂を豊に再<sup>あが</sup>られたり。矩

伯の庶人が瑾璋を裘衛より取れり。才（＝財）は八十朋な

り。その寅にそれ田十田<sup>ま</sup>せん。矩或<sup>また</sup>赤琥を兩・麀犀を

兩・賁貽を一取れり。才は廿朋なり。それ田三田を<sup>ま</sup>せん

と。裘衛は迺ち伯邑父・榮伯・定伯・琫伯・單伯に虘告せ

り。伯邑父・榮伯・定伯・琫伯・單伯は迺ち參有司たる司

土の微邑・司馬の單旗・司工の邑人の服に令せり。眾<sup>もろ</sup>に田

馬單旗・司工邑人服。眾

受田、癸・趙・衛小子諫。逆

者其饗。衛用作朕文考惠

孟寶般。衛其萬年永寶用。

を受けしは、癸・趙・衛の小子の諫なり。逆する者それ饗せり。衛はもつてわが文考の惠孟の寶盤を作れり。衛よそれ萬年も永く寶として用いんことを。

この銘の最初の二行には、王が豊すなわち鄭京において旂をかかげたことが書かれるが、これは共王が鄭京において朝會を行なったことを示すものと考えられる。<sup>⑤</sup>第二行後半から第六行にかけての部分は矩伯の庶人が衛から瑾璋を得、それに對して田十田を衛に舍し、さらに矩伯が衛より一對の赤色の琥、鹿皮製の肩當てなどを得たかわりに三田を舍したことを記している。

この瑾璋などと田との交換が行なわれたのは、おそらく冒頭に記された朝會の日ではなくて、それより以前に行なわれたものと考えられる。<sup>⑥</sup>しかもこの交換が矩伯と衛との間において對等の立場で行なわれたものではなく、衛にとっては強制されたものであった可能性がある。というのは、取瑾璋というときの取には上位のものが下位のものから何かを入手する意味がふくまれているからである。例えば駒父盃の銘文では、周王朝の官吏が淮夷から「取る」のに對して、同じことが淮夷の側からは「獻ず」と言われていることからもうかがえる。<sup>⑦</sup>『詩』や『春秋左氏傳』において使用される取字も、多くは力による強制をとまなう場合が多い。<sup>⑧</sup>そのために『韓詩外傳』や『儀禮』郷飲酒禮の疏などに、上位のものが得るのを取と言うという解釋が傳えられているのである。<sup>⑨</sup>

それはともかく、この一段の文によると、瑾璋は寶貝八十朋の價值があり、それが田十田によって支拂われようとしたことがわかる。また赤琥などは寶貝二十朋に相當し、田を三田舍することによって支拂われようとしたのである。このとき八十朋と「其舍田十田」との間には「厥賓」（その賓）という語がおかれている。前節にも指摘したように、周瑗氏がこの賓を價と解したのである。たしかにこの部分においては、價の意味にとれば、寶貝としては八十朋であり、その價

格として十田の田を舍すということになって、文の意味が通じ易くなる。しかしさきにもふれたように、五祀鼎では價の意味では通じ難い。それならば租の意味にとればどうかというところ、出租によって利益を得るのはだれかと言うことが問題になる。

一般に出租という場合、地主が小作人などに土地を貸し、その代償として租を得るのであり、その租の率を高くすることによって地主が利益を收奪する方法である。若しこれと同じ意味を考えるとすれば、この場合、土地を出租するのは衛でなければならなくなる。そうでなければ、衛は瑾璋などを矩伯に譲渡した上に、さらに租という形式で矩伯の收奪を受けることになってしまうのである。しかしこの文には、主格となるものは矩しかあらわれないから、厥貢、其舍田十田の主格を衛とすることは不可能であるし、つぎの第四行後半から第六行にかけての部分についても、同じことが言われるものと考えられる。この第四行後半以降の部分には、厥貢の二字が省略されているから、文章としては當然矩が主格であると考えざるを得ない。そのことから考えても、第二行目から第四行にかけても、主格は矩としなければならず、そうなければ少なくとも、出租という語の一般的な概念では貢という文字を理解することはできなくなるといえる。もっとも、唐氏も言うように、矩伯に農業經營の意欲がなく、衛がそこにつけ込んで安く土地を借りて利益をあげ、それを足場として新しい農業經營と土地所有への道に進んだと言えないこともない。一般論としてこのようなことを考えることは不可能ではないが、この銘文をそのような意味に理解できるかどうかはまた別の問題である。また唐氏らは、當時の土地は原則として王の所有であり、領主は收租權、用役權などを認められるにすぎないので、所有權の移讓などはありません、收租權の移讓になると考えていることも、この貢字を租の意味とする根據になっているが、それならば尙更出租という意味にすることは問題になるのであり、私としては租の意味にまで擴大することは賛成できない。此處でも前節と同じように、「割り當てられたもの」を意味する語とするのが穩當と考えられる。

さらに、西周の金文には租という語があったことにも注意しておく必要がある。歸从鼎の「號旅迺使攸衛牧誓曰、我弗

具付霽从其租、射分田邑、則放」(號旅すなわち攸衛牧をして誓わしめて曰く、われが霽从にその租を具付し、田邑を射分するに弗れば、すなわち放たれん)という文には、租という語があらわれる。この鼎の記事は、その前段に攸衛牧が霽从の田などを手に入れようとしたために、霽从が提訴したことが記され、その結果、賠償として攸衛牧は霽从に租を付し、田邑を分つことが決定されたのである。この霽从鼎の銘文中の租と田邑との關係は、一つの否定詞「弗」によって否定されているが、それぞれ具付と射分という動詞の目的語となっていることから考えて、租と田邑とは別のものであることがわかる。私はこの租は霽从と攸衛牧との間の貸借にもとづく租ではなく、攸衛牧によって奪われた、本來霽从がその所有する田から得ることのできる租であり、それを全額還付させたことを意味するものであると考えている。その上に賠償として何がしかの田邑が分けられたものであらう。

そのほかに、この一段から次のようなことが考えられる。瑾璋が八十朋で十田、琥などは二十朋で三田とされている。寶貝通りであれば、後者の田は當然二・五田となる筈であるが、三田とされるのは、おそらく一田というのが當時の最少の耕地の單位であり、これを分割することが不可能であったからではないかと考えられる。もっとも田とよばれるものの面積の均一性の問題、或いは肥瘦などの問題もあって、一概には斷言できないが、一つの可能性として考慮しておく必要があるし、また唐蘭氏の一田を百畝とする説にも、一理が認められるのである。

さて以上の如き物品と土地との取引きに對して、衛はその確認を王朝に求めたのであるが、それが豊における朝會の折りに行なわれたのではないかと考えられる。それが第六行後半以降にかかれる文である。その際、衛は伯邑父らに彘告したと書かれている。この彘告の彘字について、唐蘭氏らは矢聲の文字で、矢に通じ、『爾雅』釋詁に「矢陳也」とある如く、陳の意味であるとしている。即ちその物品と土地の交換の詳細を告げたと解したのであり、この説に従うべきであらう。この銘文に見える限りでは矩伯に契約の不履行があつて、衛が提訴したと考えさせるものはないので、むしろここでは、取引きとくに衛に十三田が渡されたことの確認を求めたものと考えられる。

この陳告を受けて伯邑父らは三有司に命じて確認を行なわせたのである。したがって、さきの五祀鼎の如き訟訴の場合でなくとも、土地の所有権の移轉に際しては、司土・司馬・司工の三有司による確認が必要であったことを示しているといふことができる。

かくしてこの十三田は矩伯から衛に移ったことが確認され、政府に登記されてこの交換は完了することになるが、やはりこの時にも饗應が行なわれているから、當時の習慣であったことが知られる。

### 三 九年鼎について

はじめに全文をあげる。

隹九年正月既死霸庚辰、  
 王才周駒宮、各廟。眉敖者  
 膚爲使、見于王。王大禱。矩取  
 胄車・較・賁鞬・虎幘・狴幘・畫  
 轉・鞭席・鞞・白轡乘・金鑣鏤。  
 舍矩姜帛三兩。迺舍裘衛林  
 胄里。獻厥佳顏林。我舍顏  
 陳大馬兩。舍顏姒虞咬。舍  
 顏有司壽商貌裘、蠹幘。矩  
 迺眾漚葬令壽商眾畜曰、  
 講、履付裘衛林胄里。則乃

これ九年正月既死霸庚辰に、王は周の駒宮に在りて、廟に  
 いた  
 各る。眉敖の者膚が使となりて、王に見ゆ。王大いに禱せ  
 り。矩は胄車・較・賁鞬・虎幘・狴幘・畫轉・鞭席・鞞・  
 白轡乘・金鑣鏤を取れり。矩姜に帛三兩を舍せり。迺ち裘  
 衛に林胄里を舍せり。獻、それこれ顔の林なり。我は顔陳  
 に大馬兩を舍せり。顔姒に虞咬を舍せり。顔の有司の壽商  
 に貌裘を、蠹に幘を舍せり。矩は迺ち漚葬に眾おほびて壽商と  
 畜に令して曰く、「講じて、裘衛に林胄里を履み付せよ」  
 と。則ちすなわち傘を成すこと四傘なり。顔の小子の具が

成牟四牟。顔小子具車牟、壽

商闕。舍蓋冒梯抵皮二・□

皮二・鑿烏徧皮二・舛白金二

反・厥吳喜皮二。舍漚虎幘・

琮黃・韞鞞、東臣羔裘、顔下

皮二。眾受、衛小子家。逆者其

舛、衛臣舛舛。衛用作朕文

考寶鼎。衛其萬年永寶用。

この銘文によると、矩が衛より車輻と皮革製の車馬具等を手に入れ、それと同時に衛が矩の夫人である矩姜に帛三兩を與えたのに對し、矩が衛に林を渡したことが記されている。ただこの讓渡がどのような機會に行なわれたものかといった點は必ずしも明瞭ではないし、また銘文後半第十三行以下の蓋や漚に對して皮革製品などを與えることを記した文の句讀なども必ずしも明確であるとはいえない。

しかしこの銘文は林を讓渡することを記した唯一の金文資料である點で重要であるので、その點に限定して少しく検討して見たい。先ず第一に注意すべきことは、第六行後半から第七行にわたる部分をどのように理解するかということである。矩が衛に分與したのは、單なる林のみではなく、林菴里とよばれる里であった。唐蘭氏らの言うごとく、この里は林があつたために、林菴里とよばれたものであろう。本來の名は菴里であり、その林地が重要であつたために、林字を冠することになったものと考えられる。西周金文中における林は、例えば同簋の「司場・林・虞・牧」（場と林と虞と牧とを司どれ）や免簋の「令免作司土、司鄭還斂眾虞牧」（免に令して司土となし、鄭還の斂と虞と牧とを司どらしむ）などの林・斂は官職名であり、『周禮』地官の林衡のごとき森林を管理する職であると考えられている。これに對して尹姁鼎

これ牟じ、壽商が闕せり。蓋に冒梯抵皮二・□皮二・鑿烏徧皮二・舛白金二板・厥吳喜皮二を舍せり。漚に虎幘・琮黃・韞鞞を、東臣に羔裘を、顔に下皮二を舍せり。眾に受けしは、衛の小子の家なり。逆者それ舛し、衛の臣の舛は舛せり。衛もつてわが文考の寶鼎を作れり。衛よそれ萬年も永く寶として用いんことを。

（穆公鼎とも呼ばれる）の「穆公作尹姑宗室于繇林」（穆公が尹姑の宗室を繇林に作れり）の繇林は森林の意味の林であり、本銘の林と同じ意味である。この尹姑鼎の繇林には尹姑の宗室が作られたのであるが、この宗室はおそらく宗廟といったもののみではなく、少なくともその祭祀と一族の統合を維持してゆくに必要な経済的な収入がその林の産物によって得られるように考えられていたものであろう。この九年鼎の林にしても何等かの収入が得られた筈である。

ところでこの林のある里というものも、西周金文には稀にしかあらわれない。大簋の「王呼吳師召大、錫繇嬰里」（王が吳師を呼んで大を召さしめ、繇嬰の里を錫えり）という里は、本銘の里と同じものであろう。そのほか令彝や史頌簋の里君、饒簋の里人などは里の首長、里の構成員をさすものであろう。しかしこの里がどのような規模のものであったのか、例えば唐蘭氏が一例としてあげる『周禮』遂人の「五家爲鄰、五鄰爲里」の里、すなわち二十五家よりなる里、或いは『尚書大傳』の「八家爲鄰、三鄰爲朋、三朋爲里」の里、すなわち七十二家よりなる里であるかどうかは、金文からは決定できない。しかし本銘の第十行にあらわれる漚彝の彝が唐蘭氏の言う如く、鄰であり、遂人などの行政単位としての鄰であるとするれば、おそらくこの里もその上級の単位であったとすることができよう。しかし『周禮』などにあらわれる里の規模がそのまま西周金文の里にあてはめることができるか否かは疑問で、本銘のように、衛に利益を生むことのできる林がこの里にふくまれているとするならば、『周禮』などの里より規模の大きなものであったと考えたほうがよいように思われる。しかもこの里を統率するものが里君であり、例えばさきにあげた大簋の繇嬰里の繇嬰は史頌簋などに登場する里君ではなかったかと考えられる。この里君は、令彝では卿事寮・諸尹などと共にあげられ、諸侯とは區別され、また『尚書』酒誥の里居——これは里君の誤りであることは諸家の認めるところである——が内服に属するものとして百僚などとともにあげられていることを考えると、里君は本來王室の直轄領内におかれたものであろう。しかし大簋などに見られるように、里が貴族に與えられることによって、里の統率者である里君は、その貴族の家臣と化したものと考えられる。<sup>⑤</sup>

本銘の里もそのような里であった可能性がある。

つぎに第七行を見ると、顔林という語がある。この顔は、周瑗・林甘泉兩氏は、小奴隸主の氏の名であり、この九年より以前に矩伯がこの林を顔氏に分與していたものであり、その顔氏の所有となっていた林を、この度の交換の代償として改めて衛に舍したものと考えている。このように理解した理由は、さきにあげた大簋の遼嬰里を、遼嬰という小領主の領地である里というこれまでの解釋に従ったところであり、この九年鼎銘の顔林も同じように考えたのである。

しかしさきにふれたように、遼嬰を里君に相當するものと考えらるれば、この顔林の顔は奴隸主としての山林所有者というよりは、矩の配下にあつて山林を管理する者と考える可きものではなからうか。もっとも當時の農耕村落は血縁共同體の構成要素が強く、したがって里君にしても、共同體の族長的な性格を一方でもつていたと考えられるが、林の管理者である顔氏も、もとはこの山林を生活の基盤としていた共同體の族長であつたのではないかと考えられる。

この顔氏の當主が次ぎの句にあらわれる顔陳であり、その夫人が顔姒、その配下の役人―おそらく族人中の主要なものであろう―に壽商と盤の二人があつた。この四人に對して馬などを贈つたのが我であるが、この我が誰であるのか、唐蘭氏は矩であるとし、周瑗・林甘泉兩氏は衛と考へている。私もこれは衛であると考へる。この林が矩から衛に渡るについて、衛がその管理者である顔陳らに贈物を與え、將來衛の配下に入るのに對して、信賴と恩寵を示したのではないかと考へられる。かつて私が晉鼎の銘文について考證したように、晉が限から五人の人間を受けとるについて、五人に酒と羊と三孚の絲を贈っていることから見ても、ここで顔陳らに馬や皮革製品などを贈つたとしても、何の不思議はなく、むしろ當然であつたと考へられる。

このように衛が顔陳らに贈物したのち、はじめて矩は壽商らに命じて、林の讓渡の取り決めを受諾させ、その上で、現地を實際に踏査して衛に讓渡したのである。この時、その林地の四方に標識をたてて境界を設定し、さらに壽商がその境界が正確かどうかを検査している。

その後、第十三行以下に再び盂らに皮革製品を贈つたことが記録される。この部分にもさきにふれたように句讀の上で



問題とすべき點があるが、ここではふれない。

さて以上によつて顔陳の管理する林の譲渡が完了するが、このとき譲渡された林が顔林の全部なのか、或いは胥里の近傍の部分のみなのかは必ずしも明らかではない。當時田は細分化して贈與されているから、林の譲渡にもその可能性がある。とくに後半において皮革製品（皮製品）の贈與を受けたのが、顔の有司のうちの盞のみである可能性があると考えられるが、若しそうであるならば、顔林のうち盞の差配を受けていた部分が譲渡されたと考えられるからである。ただこの點を正確に知るためには、第十行以下の句讀を再検討する必要があるので、この點は後日に譲りたいと思う。

#### 四 結 び

以上三節に分けて、衛の諸器の銘文を概観して來た。それによると、衛は玉器とか皮革製品などと交換することによつて、田と林を入手していたことがわかる。しかもその交換の對象は、衛よりも上位の階層にあつた矩伯とか邦君厲によつて、半ば強制的に求められたと考えられるものであつた。そこで問題になることは、衛はどの程度の身分のものであつたかということであろう。

衛によつて作られた銅器には、このほかに左にあげる衛簠がある。

隹廿又七年三月既生霸戊

戌、王在周。各大室、卽位。南

伯入右裘衛入門、立中廷、

北嚮。王呼内史錫衛戴市・

朱璜・鑾。衛拜稽首、敢對揚

天子不顯休、用作朕文祖

これ廿又七年三月既生霸戊戌に、王は周に在り。大室に各り、位に卽けり。南伯入りて裘衛を右ミナけて門を入り、中廷に立ちて、北嚮せり。王は内史を呼んで、衛に戴市・朱璜・鑾を錫えり。衛は拜し稽首し、敢えて天子の不顯なる休に對揚して、用つてわが文祖考の寶殷を作れり。衛よ、

考寶殷。衛其子々孫々永寶用。

それ子々孫々永く寶として用いんことを。

この銘文によると、衛は南伯を右者として王より載市などを與えられている。西周後半における金文の一般的な傾向からすると、載市などを與えられるのは、ある官職に任命される場合が多く、金文にも、官職への舒任とそれに併う王の恩寵を示すための衣服などの賜與がともに記録される。しかるにこの衛簋にはそのような舒任の記載は見られない。省略された可能性もなくはないが、物品の賜與と官職舒任との重要性から言えば、官職舒任がより重要であり、それによって西周王朝内における自己の地位が明らかになるのであるから、むしろ物品の賜與が省略されることはあり得ても、官職舒任の冊命を省略したとはまず考えられない。したがってこの二十七年三月においては、衛は官職の舒任を受けることはなく、恩賞のみを受けたことになる。もっともこの二十七年以前にすでに何かの官職に任命されていたこともあり得る。この點に關して唐蘭・周瑗兩氏は、衛が裘衛とよばれていることよって、『周禮』天官の司裘に類した職についていたのではないかと考えている。たしかに九年鼎など、衛から多數の皮革製品が讓渡されているから、衛はそれらを容易に入手できる立場にあったことは事實であろう。また同一の銘文内でも裘衛とよばれたり、衛とよばれたりしていることから考えて、裘衛の裘は稱號といったものであることは明らかで、唐蘭氏の説も充分可能性が認められる。もしこの考え方が認められるとすれば、衛はこの二十七年より以前にすでに司裘の如き官職についていたと考えてよい。

しかし、『周禮』によれば、この司裘の職は中士であり、同じく天官中の掌皮は下士であるから、むしろ下級の官である。これに對して衛はどうであろうか。私はやはり下級の官であり身分であったと推測している。それが大夫に對する士の如き身分であったかどうかということは別として、おそらく本來は直接王より舒任の冊命を受けるような身分ではなく、ようやく穆王末年に王に目通りがゆるされるようになったのであり、それがこの簋の銘であると考えられる。

ところでこの衛簋など四器は、實は一つの窖から他の三十四の青銅器とともに發見されたものである。その青銅器の年代は、衛簋が穆王期とされ、そのほかの衛盃・五祀鼎・九年鼎はいずれも共王期のものである。そのほか同出した青銅器

はほとんどが厲王・宣王期といわれる。これらの青銅器は衛を祖先とする一族のものであり、西周末期の混亂の時に、下の穴藏に家寶として祕藏されたものと考えられる。したがって衛の子孫と考えられる人びとの青銅器の銘文によって、その家の身分を考察する手掛りが得られないかと思う。

たとえば此鼎の銘によると、此という人物が、王の冊命を受け、邑人の膳夫を旅す―率いるの意か―ことを命ぜられ、玄衣など數點の品物を賜與されている。<sup>⑤</sup>この此は明らかに王より直接冊命を受けている。また成伯孫父鬲の銘によれば、この一族から、文王から出た成伯のもとに嫁した女性があったことがわかる。<sup>⑥</sup>したがって厲王・宣王の時期になって王より直接冊命を受けるようになったものと考えられる。裴衛の時代はようやく王に目通りを許されることが可能になった時代であろう。しかし同出の他器の銘文によれば、厲王・宣王時代にもなお一族の間には魏仲や榮伯の家臣であったものもいたことが明らかであるから、裴衛の一族はなお上層貴族の身分にはなることができなかったものと考えられる。それはやはり周王朝内部の身分制が強く社會を規制していたことによるものであろう。

ところで、裴衛の時代にその一族が社會的に上昇し始めることが可能になった理由は何であろうか。周瑗氏は衛が官職として管理していた皮革製造という手工業を通じて私産を増加させ、土地を手に入れたものと考えている。たしかに衛の諸器に見る限り、その交換が對等であったか否かは別として、皮革製品などを出すことによって、衛は田や林を入手しているのであるから、周瑗氏の如く考えることが可能である。

また唐蘭氏は、當時土地は國有制であり、奴隸所有貴族は、國の公田の利用を王より許され、奴隸を使用して公田を耕作させて利益をあげていた。しかし西周の武王期より昭王・穆王期にかけて行なわれた遠征と外への發展に心酔した貴族は、公田の經營を怠たり、田地は荒蕪化し、奴隸は逃亡減少した。この奴隸所有貴族が銘文の矩伯や邦君厲である。彼等は公田の經營に意欲を失なったのである。これに對して裴衛などの新しい農業奴隸主は、逃亡奴隸を招募し、舊い奴隸所有貴族の土地を租借して新しい經營を行なって利益をあげた。このようにして土地の國有制を崩す契機を造り出したと考

えている。林甘泉氏もこれとほぼ同じように考えている。先にもふれたように唐蘭氏らは、奴隸所有貴族は田を出租したものと考えている。前述の如く、この點は認められないが、舊い奴隸所有貴族が田の經營を怠り、土地を輕視したことは、當時の世相として充分認められることであり、その結果、田や林を手放すことにそれほど抵抗を感じなかったのである。

たしかに私自身もかつてふれたように、昭王・穆王期における外への進出の停滯と、それまでに行なわれた進出による周王朝内部の結合の弛緩は、共王期に社會的な變動を生じさせ、社會的な再編成を必要とした。裘衛らに擡頭を可能にしたのは、このような時代的な背景があつたからであると考えられる。この社會的變動は、身分構成に變化を生じさせる一方で、土地の所有・經營の形態にも變化を生じさせた。かつてふれたように、西周後期になって、一つの邑に所屬する田が細分され、また農民も舊來の村落に居住しながら、他の領主に移讓されることがあつたこと、また農民の他領への逃亡があつたことなどについて述べた。それとともに農民に對する支配の關係にも變化があつたことを推測した。

本稿において検討した衛の諸器の銘文によつても、田の細分が確認された。とくに五祀鼎によると、厲の邑の耕地のうち東南角の四田が衛に割讓されているが、その四田の周圍は、厲・散・政父などの所有する田によつてとり圍まれているものであつた。<sup>③</sup> このことは重要な問題を提起しているものと考えられる。

西周時代の領主が土地を與えられる場合、基本的には、宜侯矢簋に見られるように、邑とか河川とか、或いは山林なども含む一定の領域が與えられるものであつた。その際耕地である田は當然邑に所屬しており、また河川や山林などの管理利用も領主に認められていたと考えられる。<sup>④</sup> したがつて領主はある領域をいわば莊園のようにして經營していたとすることができるところが、五祀鼎によれば、衛は四田という少量の耕地を手に入れて、土地經營を行なおうとしているのである。このことは、領主の土地經營とは根本的に異質のものと言わねばならない。一方が「莊園領主」的であるのに對して、衛などの場合は「地主」的と言うように表現することができよう。このような例は、卯簋にも見え、玉器や馬を與え

られるとともに、「錫于𠂔一田。錫于𠂔一田。錫于𠂔一田。錫于𠂔一田」(𠂔に一田を錫えり。𠂔に一田を錫えり。隊に一田を錫えり。隊に一田を錫えり。)と言うように𠂔など四つの土地にそれぞれ一田ずつを與えられている。大克鼎の場合には田の數量を擧げていないが、七つの土地に田を與えられており、これも卯簋と同じような可能性がある。このようなことは、西周後期になって、新しい土地經營が次第に普及して來たことを示していると言えよう。もっとも衛にしても卯にしてみればこれ以外にも土地を所有していた可能性、とくに衛の場合には實際に別に十三田を得ているのであるが、重要な點は、分散した小規模の土地を手に入れたために、當然その土地經營には莊園的な經營方法とはことなつた方法を考慮せざるを得なかつたと考えられることである。

唐蘭氏をはじめ、中國の學者は、裘衛も矩伯なども同じく奴隸主であるとし、農業は奴隸を使用することによつて經營されているとしている。舊い奴隸所有貴族と新しい農業奴隸主との間にどのような經營上の差異があるのかは明らかにしていない。しかし土地の所有の形態にはつきりとした差異があらわれている以上、當然その經營にも變化があつた筈である。このことを明示するような資料は、西周の金文にも、また古典にも見られないので、それは推測の域を出ない。しかつてふれたように、西周後期には、領主や土地所有者と農民との間に、個人單位の關係があらわれ、それは小土地所有と平行した現象であつたことを考えると、衛の場合にも、矩伯らの領主的な農民支配とはことなつて、個人的な支配關係が強くなつていたものと考えられる。中國の學者は、同じく奴隸制として概括的に扱い、兩者の間に嚴密な區別を行なっていないが、以上のようなことから考えて、矩伯らと衛との間には差異があつたことを考慮しなければならないと言えよう。その違いを古代東方的奴隸制と古典的奴隸制との差と考えるか、或いは奴隸制と封建制との差と考えるか、確證はできないが、私には後者の考えのほうが、春秋戰國時代の性格を考える上で優位におかれるもののように思われる。

さて以上衛の諸器の銘文について考察して來た。その結論は必ずしも明確なものではなかつたが、もっとも重要な點として、田や林の細分化された所有が、西周共王時代にあらわれていたこと、それにしがつて新しい農業經營が行なわれ

るようになってきた點を明らかにすることができたと思う。その經營の質的な變化をどのように把握すべきか、それについては推測を述べたにとどまった。今後の考究によって一步を進めることができたと考えている。

## 註

- ① 龐懷清・鎮烽・忠如・志儒「陝西省岐山縣董家村西周銅器窖穴發掘簡報」、林甘泉「對西周土地關係的幾點新認識——讀岐山董家村出土銅器銘文」、唐蘭「陝西省岐山縣董家村新出西周重要銅器銘辭的譯文和注釋」(以上『文物』一九七六年第五期)、唐蘭「用青銅器銘文來研究西周史——綜論寶雞市近年發現的一批青銅器的重要歷史價值」、周瑗「矩伯、姜衛兩家族的消長與周禮的崩壞——試論董家青銅器群」(以上『文物』一九七六年第六期)
- ② 唐蘭氏は、田五田で句とし、正を邢伯ら長官たちを示す語として、下句の主語とするが、銘文第七行以下に邢伯ら五人を再び列記することから考えて、この正は長官たちの意味とするのは不當と考える。散氏盤に「正眉矢舍散田」(眉の矢が散に舍せし田を正せり)というときの正と同様の意味に解し、五田を舍することによって、混亂した境界を正しいものにしようとしたという意味にとる。
- ③ 銘文では衛小子者となっているが、衛盂・九年鼎と比較すると、衛の小子の名と逆字とが誤って脱落したものと考えられる。
- ④ 唐蘭・林甘泉・周瑗の三氏は、この「以：告于…」の句形を訴訟を示すときのものとは考え及ばなかったようであるが、本銘の性格を考える重要な點である。
- ⑤ 唐蘭氏がこのように解した理由は、氏の「西周銅器斷代中的『康宮』問題」(『考古學報』一九六二年第一期)において、昭王の廟は康王の廟に附置されていると考えているため、その東北の地で土木工事を行なうようなことはなく、したがって渭水・涇水の二川に對する祭祭を行なったと解したと考えられる。
- ⑥ 周瑗氏は、この營を匪居と解するが、それは皮革製造を業とする衛が、その仕事に便利なように、二河川のある地域に居を造ったと解するのである。この説には疑問があり、註⑧を参照されたい。
- ⑦ 唐蘭氏が、舍田を共王の意によるものと考えた理由は明らかにされていないが、土地は原則として王の所有であり、諸侯などは收租權などを認められるに過ぎないと考えたことによるものであるうか。ただこの銘文のみからは、共王がそのような意圖をもつに至った理由は不明であり、このように考える必要はない。
- ⑧ 註⑥でもふれたように、周瑗氏は、姜衛は皮革製造に必要な水流の便を得るために、二川の流域で新しく居を構えたと解している。氏はその前の余執龔王恤功于昭大室東逆で斷句し、しかも執を主、龔を供、恤功を謹慎服事する動詞とし、余すなわち衛は王に皮革を供することを主どり、昭の大室の東北で謹慎

服事すと解しているが、文脈として不自然である。

- ⑨ 林甘泉氏は、第三行後半から第五行にわたる部分を、二川を營治して功が有り、共王が田五田を賞賜したと解しているから、この部分が銘文中でどのような意味をもつのか却って不明になると言わざるを得ない。

- ⑩ 郭沫若『兩周金文辭大系』攷釋頌鼎の項、白川靜『金文通釋』二四頌壺（『白鶴美術館誌』第二四輯）など参照。

- ⑪ 晉鼎や九年衛鼎などに見られる舍字は矢や皮革製品・馬などを對象として使用され、これらを借すような意味には到底解釋できないことを考える必要がある。

- ⑫ 帥字については、唐蘭氏は參有司や内史友が帶領して一連れ立っての意味になる——と解し、龍懷清氏は循字にあて、土地の境界に沿って行くの意に解している。金文の用例によると、例えば番生簋の「番生不敢弗帥型皇祖考盞元德」（番生は敢えて皇祖考の盞いなる天德に帥型おそらざることあらず）、師虎簋の「今余佳帥型先王令」（いまわれこれ先王の令に帥型らん）の如く、ある規範にしたがう意味に使用されるのが普通であるから、唐蘭氏の解は不適當であり、また龍氏の解よりも、邢伯らによって下された決定に従うの意に解したほうがよいと考えられる。

- ⑬ 拙稿『中國古代王朝の形成』（創文社一九七五年）第二部第二章「邑の構造とその支配」参照。

- ⑭ 註⑬及び同書附錄三「參有嗣考」参照。このことは唐蘭氏らが考えるように、土地は原則として王有であり、收租權などが認められるに過ぎないことを意味するものではない。西

周において行なわれた封建制度は、諸侯や領主に廣範な支配權を認めていたと考えられるが、諸侯を掌握し、貢納を課するためには、王朝において土地や民の實情を正確に承知しておく必要があったのである。王有とか國有といった觀念のみでは實際に即しないものとなるであろう。

- ⑮ 鄭は文王の都の鄭京のことである。武王は東の鎬に都を遷したが、その後も鄭には王宮などの設備があったものらしく、康王の時にも、鄭において朝會が行なわれたと『春秋左氏傳』昭公四年に伝えられている。

- ⑯ 林甘泉氏は、矩の庶人らが衛から瑾璋を入手したのは、この朝會のときに必要となつたためであると考えているが、私は直接關係はないと考えている。

- ⑰ 駒父匱には「佳王十又八年正月、南仲邦父命駒父卽南諸侯達高父、見南淮夷、厥取厥服。萑夷俗家不敢不敬畏王命。逆見我、厥獻厥服。……以下略」（これ王の十又八年正月、南仲邦父は駒父に命じて南諸侯に卽いて高父を達よこがえ、南淮夷を見、それ取りそれ服せよ、萑夷の俗家は敢えて王命を敬畏せずんばあらず。逆えて我に見え、それ獻じそれ服せんと）とある。

- ⑱ 『春秋左氏傳』隱公三年四月の「鄭祭足帥師取溫之麥。秋又取成周之禾。」や成公十六年の「宣伯通於穆姜、欲去季孟而取其室」など。

- ⑲ 『韓詩外傳』卷五には「君取於臣、謂之取」、「儀禮」郷飲酒禮の疏には「尊者得卑者物言取」とある。

- ⑳ この鬲从鼎の射分の射は一般に謝字であるとされ、謝して田邑を分つと解されているが、舍と射とは古音も同じであり、或

いは舎と同音であることによって射と書かれたのかとも考えられる。

②① 註⑭参照。

②② 矩が衛から胄車などを入取したのは、唐蘭氏によれば、矩が卿として眉敖の使者を接待する必要から行なったものであると解している。たしかにこれも一つの考え方であるが、この眉敖の使者の朝見の記事は大事紀年の方法である可能性もあり、また胄車の入手と林の譲渡はそれ以前のものであり、この朝見の機会に行なわれた朝會に林の譲渡の確認が政府によって行なわれたという可能性もあることを考慮しておく必要がある。ただ衛盂や五祀鼎などによれば田の譲渡には、邢伯などの合議や三有司の確認が記録されているのに對し、この鼎にはそれがないため、唐蘭氏のように、この林晉里は矩の私有地であり、王朝の記録外のものであったろうと考えることは危険であろう。銘文に譲渡を記録することは、その證據文書とする目的であるが、ただこれのみではその證據としての力が弱く、當然王朝の記録と對照させて始めて有効になるのであるから、政府に對する何等かの手續きは行なわれたと考える可きであろう。

また第十三行の舎盞より第十五行の喜皮二までの文中には舎の對象になる人物は盞一人しかないと考えられる。これに對して第十五行舎盞より第十七行皮二までの文には、漚のほかに東臣と顔が人名として考えられ、舎の對象であると考えられる。ただ第十三行の舎盞以下の文形と比較すれば、人名は盞一名である可能性もある。また東臣・顔を人名とした場合、この二人とくに東臣なる人物がこの譲渡に際してどのような地位を占め

る人物であったかななどの點が、この銘文のみからは不明である。

②③ 白川靜氏は、宗室は祀廟のあるところであるとされる（『金文通釋』一四尹姑鼎、『白鶴美術館誌』一四）。金文における室字は單なる建造物の意味ではなく、族産といった意味があり、そこには動産・不動産や隸屬氏なども含まれている。『春秋左氏傳』にあらわれる分室・納室といったときの室と殆んど同じである。この尹姑鼎において宗室が繇林に作られたことは、むしろ繇林をその一族の族産として與えられたと理解することができであろう。宗廟を中心としてその族産が運営されるということとは、類似したものとしては、鄭が泰山の祭祀のために與えられた祔の地などをあげることができる。

②④ 本銘第十行に漚葬なる語があらわれる。本稿でもふれたように、唐蘭氏の說に従って、この葬を、里より下位の單位である鄭であるとするができるならば、漚鄭の漚は第十五行に人名としてあらわれるのであるから、鄭の長の名でよばれた、或いは鄭の長はその鄭の名でよばれたと考えられる。里の場合にも同じことが言えよう。したがって一般に越嬰は領主の名と考えられているが、私は里君の名と考えることにしたのである。

②⑤ 大夫の下にある士には、このような里君であったものも含まれていたと考えられる。

②⑥ 註⑬。

②⑦ 周瓊氏は、衛が皮革製造を業としていたので、林の狐狸を描えて衛に舍えたと解している。すなわち林晉里の晉を晉＝狐、里を狸と釋している。また壽商闕の闕字を冤字に釋し、網で動



物を捕えることと解しているが、鬺字を窺と釋することは字形から見て不可能である。また舊よりも舊字に釋するほうが、よりもとの字形に近く、従って周氏の説はとらない。

②⑧ 衛盂にあらわれる榮伯、五祀鼎の邢伯・伯俗父は、また永孟や長由孟にもあらわれ、穆王・共王期に活躍した人びとである。

②⑨ 此鼎には「王呼史參冊令此曰、『旅邑人膳夫。錫汝玄衣・黻純・赤市・朱璜・纁旂』(王は史の參を呼んで此に冊令せしめて曰く、邑人の膳夫を旅せよ。汝に玄衣・黻純・赤市・朱璜・纁旂を賜えり)」とある。

③⑩ 成伯孫父鬲の銘は「成伯孫父作滯羸鬲。子々孫々永寶用。」である。

③⑪ 公臣簋に「虢仲令公臣、司朕百工、錫汝馬乘・鐘五・金、用事。公臣拜稽首、敢揚天尹丕顯休、用作尊毳。公臣其萬年用寶茲休。」(虢仲は公臣に令して、わが百工を司どらしめ、汝に馬乘・鐘五・金を賜えり、用って事えよと。公臣は拜し稽首し、敢えて天尹―虢仲―の不顯なる休に揚え、用って尊毳を作れり。公臣よそれ萬年も用ってこの休を寶とせよ)とあり、虢仲

が自己の百工を公臣に司どらせている。また榮有司鬲には「榮有司再作羸鬲、用腰羸羸母。」(榮の有司たる再は羸鬲を作り、用して羸羸母に腰れり)とある。

③⑫ この散が散氏盤の散であるか否かは、この銘のみからは明らかにできないが、散氏盤と地名の上で關係の深い大克鼎が、この衛の一群の出土した董家村に近い任村から出土していることと併せ考えると、この散は散氏のことである可能性が強い。若しこれが認められるならば、岐山・扶風兩縣にわたる一帯は、早くからその土地の領有關係が複雑であったと考える可きものとなり、この地域が西周の根據地として、大小の領主によって占有されていたといわなければならない。註⑬参照。

③⑬ 林甘泉氏は、山林川澤は本來國家の所有で、私人が手をつけることは禁じられていたが、その制度が崩壊していたものと考えている。しかし、宜侯矢簋の銘によれば、西周の封建制度においては、田邑のみならず、川など―宜侯矢簋では川以外は器が破損しているため不明ではあるが―も諸侯に與えられていたことは明らかである。

附記 五祀鼎の銘により、かつて發表した(「永孟銘考」『神戸大學文學部紀要』2)永孟の銘文の釋讀と、永と師俗父との關係に對する考え方の一部を訂正することが必要となったが、この點については別の機會に譲ることとする。

## A Study of Various Vessels by Ch'iu Wei 婁衛

*Itoh Michiharu*

Through investigating the inscriptions on four vessels by Ch'iu Wei included among inscriptions on the copper vessels discovered at the Tung chia village 董家 of the Ch'i-shan district 岐山, Shensi 陝西 in February 1975, the following conclusions were drawn.

(1) In the Kung Wang 共王 period of the Western Chou 西周, a new social structure appeared due to the cessation of the outward expansion of the Western Chou Dynasty which had been taking place up to this time. From among the lower class aristocracy there appeared those who rose in status.

(2) In place of the "manorial lord" type of land ownership common up to this time, there appeared a type of land ownership in which a "landlord" carried out the management of the land on a small scale.

(3) Due to the limitations imposed by the historical materials, the actual conditions of such small scale management are unclear; however, it can be seen not only in farm lands but in forest areas as well.

(4) The above results make a re-investigation of the productive structure of the Western Chou period necessary.

Considering the above results, it can be said that this group of inscriptions by Ch'iu Wei will hold an extremely important place in the study of Western Chou history from now on.